高専学生の「やる気」雑感

Stray thought on volition of study of college student

加藤 道友*

Michitomo KATO*

地元の国立大学を経て故郷の高専に移って20年になる。昭和37年度に国立高専一期校として12校が設立されて以来、20数年を経て国立高専も54校を数えた。この間、学科増・施設設備の拡充と改組により高等教育機関としての機能を整えてきた。就職は毎年好調で、入社2年後には大卒に準じた処遇をうけるなど、外側から眺めると順風満帆のようにみえる。しかし15才人口の減少を目前にして、各高専では学内外での活性化対策に懸命に取り組んでいるのが現状である。

高専創設時から2～3年間の入学者の質は目を見張るものがあつたそうだが、種々の問題点が指摘されて次第に質の低下を招いたようである。しかし10年程前からは向上の模様で、現在では中学校のクラスの「中の上～上の中」という平均以上の学力をもった生徒が入学しており、普通科高校の進学校と比較しても遜色ないと思われる。だが毎日学生と接触していると欠点ばかりが目につき、また学生側にも学校生活に不満を洩らす者が多い。特に、「やる気」の無さに端を発する「中だるみ」という現象は、高専の抱える大きな問題点である。教務主事任中に全校学生を対象にして「生活状況」と「やる気」について調査したことがあるので、感じたことを述べてみたい。独断と偏見に満ちたものになるかも知れないがご容赦願いたい。なお「やる気」にはいろいろあろうが、ここでは学習意欲として捉えることにした。

〔志望時の目的意識とやる気〕 進路の決定を可能な限り遅らせようとする傾向の強い今日、高専へ進学するのを私は15才の決断と称している。入試での面接では中学での指導もあって全員が「自分で決めた」と言っているが、調査では「やる気」の少ない者の半数足らずがそうではないらしい。また「やる気」が薄くなるにつれて「高専へは専門の技術者になるために志願した」という者が減少している。「やる気」を低下させないためには、明確な目的意識を持った者を多く入学させたい。

〔適応感とやる気〕 学科に対する適応感は低い者が多いが、文科系への適性は否定する者が多い。2志望制の影響だろうか。特に理由も無く欠席したいと思うことがあるものは2年生に多く、3年生になると教官に対する不満と共に制度への不満が増えている。学年全般的にみて適応感の増加と共に「やる気」も増えている。

〔学習態度とやる気〕 「やる気」の大きい者ほど興味の持てる科目があるようだが、ノートをとることについてはほぼ全員がそう心掛けている。ただ集中心は「やる気」の多寡と密接な関連がある。試験が近づいてもそれほど「やる気」はおきないが、留年はしたくないので一週間前からなんとか計画は立

* 新居浜工業高等専門学校 教授
受理日：平成2年4月23日

てて勉強し始めるらしい。授業の過密に対する不満を洩らしつつも、4・5年生の多くは「やる気」に関係なく、先端的な科目についてはもっと勉強したいという欲望が強い。学年と「やる気」に無関係に成績の低下は気になるらしく、特に低学年では科目別に勉強の仕方について助言を望んでいる。

〔やる気を無くす授業〕 授業が判らないという不満はかなり強く、特に難解なテキストの使用、かなりの人数が判っていないのに先に進むことへの不満、ノートをとることに懸命で理解するための余裕がないことへの不満がきわめて強い。また板書の字が雑然としていること、ノートし終わらないのに消してしまう無神経さ、黒板の方だけを向いての講義、私語や居眠りしても注意しないこと、テキストの説明だけで演習の無い授業、雑談の無い授業等が「やる気」の低下と繋がりやすい授業のようである。成績や受講態度が悪いからとて「学校やめたらどうや」と言われたり、皆の前で叱られたり皮肉られたりしたときも想像以上に傷つき、「やる気」を一段と無くする模様である。

〔やる気を出させる授業〕 学年に無関係に、ほとんどの学生が「やる気」がでて集中できると言っているのは「先生の説明がよくわかるとき」である。次が興味を持てた科目、テキストを読んで理解できるとき、好感をもった先生の授業、試験にだすと言われた範囲の授業のとき等、教え方に関係している。上述した事項でも「やる気」が極端に少ない者には効果が少なく彼らにだけ突出したものは無いようである。

我々の職場では、やさしいテキストの選定、演習時間の増加、小テストを頻繁に実施、進度を抑えて質問を投げかける授業、資格試験への挑戦と表彰等いろいろと試行している。いずれの方策も「やる気」のある者の「やる気」をさらに高めることはあっても、「やる気」の無い者の「やる気」を高める特効薬にはなりえないようである。ただ、設計→製図→製作→評価という物を作る総合実習には、全員が卒業研究にも劣らない関心と興味を示している。いくつかの手を根気よく打っていけば、除々に改善されていくことは疑いの無いことだと思う。特効薬は無くても幾種類もの薬を用意すれば、その中の一つくらいは効いてくるだろうし、個人個人に応じた効果も現れるのではないだろうか。

私および周囲の先生方の体験では、成績不良者の個人指導、高学年では輪番制で学生に講義をさせ、先生は質問側にまわる、「やる気」の無い者は退室させる代わりに、気持ち良く講義できれば30分も早く授業を切り上げる等が有効であったと聞いている。一人の先生がなにもかもやるのは不可能であり、効果も多寡がしれている。幸い高専は小さい組織である。全教官が意識を統一して、めいめいが何らかの方策を採用して実践すれば、何人かの学生が「やる気」をおこしてくれるのではないだろうか。学生の「やる気」は先生の「やる気」の反映であろうし、蛇足ながら先生方に「やる気」をおこさせる方策も真剣に検討されるべきであろう。